

# 今週の本棚

加藤 陽子 評

## 毒親介護

石川結貴著 (文春新書・880円)

本書の帯には、墨をバックに「嫌いな親」を介護できるか?との文字が赤と白で大きく躍る。強烈なのは惹句だけでなく、タイトルからしてそうだ。評者の妄想だが、毎日新聞読者層が地域の書店でレジに置くには勇気のいる本かもしれない。

よる親の介護問題である。親子であっても個としては別人格

## 子が加害者にならないための心得

だが本書は、「マクベス」の予言ではないが、女から生まれた者(ここでは自然分娩も帝王切開も含む)つまり全ての人の関係し、苦悩や哀楽抜きに語れぬ事柄をきっちり書いた実の良い本なのだ。その事柄とは、親による子の養育問題であり、子に

の相手に対し、その生命と心身の二つながら生殺与奪の権を握れる瞬間。それが養育・介護の時間であり、負の方向に振り切れた時、それは虐待・放棄の時間に転化する。著者は、長年にわたって児童虐待から介護ネグレクトまでのさまざまな家族の問題を専門に扱ってきた信頼すべき書き手である。

対するネガティブな言動や行動パターンを執拗に継続させた親をいう。全6章のうち4章まで、8つの典型例が親と子双方の来歴込みで描かれる。「あるある」事例満載のこの部分を読めば、酒乱・怠惰・暴力ゆえに子を支配し、子の将来の可能性を破壊し尽くした毒親の現在の無惨な在り様がわかるので、当然の報いだと

の残忍な気持ちがどうしても湧く。だが、本問題のプロである著者の狙いが、読者にその種のカタルシスを与えるところにはないのは明らかだ。また、ウチの場合はこれよりマシとの安堵感を狙ったものでもない。老いて悲惨な状態となった親に對峙した時、子の側が加害者へと転じないような初動動作の心得を伝える点に狙いがあり、毒親は究極の理念型に過ぎない。

現在の日本は、子による介護の割合が43%を超え、要介護者へ憎しみを感じた経験が35%超の人が持つのだ。そのような国にあっては、本書の説く、介護離職をしないノウハウ、介護保険申請を本人が拒否した時の後期高齢者医療保険を用いた訪問診療という迂回路、認知症の要因から見た対処法、遠距離介護時の地域包括支援センターへの繋ぎ方など、まずはそ

の智慧と情報がとても重要になる。その上で著者は、「どうして自分だけがこれほど苦しまなくてはならないのか」との思いに苛まれる人々に對し、まず視点を交えるための方策を指南する。その一つが「敵」を知ることだ。例えば、高齢者心理に詳しい長田久雄教授の説く、コーホート(一定期間に生まれた人の集団)観がある。介護を必要とする親世代は、貧困・忍耐・戦争といったキーワードがふさわしい社会に生きていた。對して子世代は、経済成長・個人主義の時代に生まれた。このズレを踏まえて初めて、1950年の国立世論調査所による調査「子どもと親の身売り」に、さまざまな条件節は付くが肯定的評価が8割超だった事実など深く理解しうる。

本書を読んでいて時に著者の当事者意識と熱が滲み出る瞬間を感じることもあった。その理由は「おわりに」で判明するが、この部分は落涙必至なので電車でも読むのはお薦めしない。

オリピックの自国開催ともなれば、期間中の報道は「ニッポンがんばれ」「ニッポンよくやった」一色になるだろう。でも、勝ち負けに一喜一憂するだけの見方にはすぐに飽きる。選手や関係者の苦勞話を感動ポルノとして消費するのも下品である。批評眼をきたえあげて観戦専門のアスリートになりたい。

競泳種目を見て「黒人はいないのか」と思ったことはないだろうか。また、マラソンや1000メートル走を見て「やっぱり黒人には勝てない」と思ったことはないか? ①は人種差別の歴史を語りつつ、「黒人特有の身体能力」という神話を問題にする。「先天的に優れた肉体をもつ黒人にはかなわない」という考え方は、「日本人は体格面で劣る」という常識をいっしょに覆す本だ。

この3冊

### この3冊

渡邊十絲子・選  
オリピック

- ①人種とスポーツ 黒人は本当に「速く」「強い」のか (川島浩平著/中公新書/924円)
- ②ドーピングの哲学 タブー視からの脱却 (ジャン＝ノエル・ミサ、パスカル・ヌーヴェル編、橋本一徑訳/新曜社/4730円)
- ③TOKYOオリピックはじめて物語 (野地秩嘉著/小学館ジュニア文庫/770円)

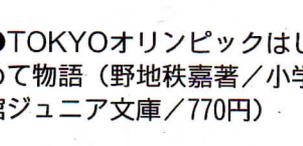
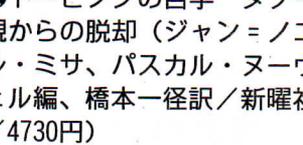
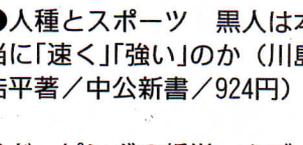
この中で注目するのが「度十」の主人公度十である。公園林の主人公度十である。「度十はいつも縄の帯をしめてわらって杜の中や畑の間をゆっくゆっくあるいてゐるのでした」と

## 宮沢賢治 デクノボーの叢知

今福龍太著 (新潮選書・1760円)

「賢治作品を読むことで、現代を生きる人々が忘れていたことをいかに再発見できるか」という言葉で始まる本を読まないわけにはいかない。

きっかけは、二〇一四年九月二七日の木曾御嶽山での大規模噴火だ。現場にいた登山者が「噴石の大きさは軽自動車



面がある」といふ常識をいっしょに覆す本だ。